



富永愛法律事務所 医師・弁護士 富永 愛 です。

司法試験に合格し、弁護士事務所での経験を積んだ後、国立大医学部を卒業し医師免許を取得。

外科医としての勤務を経て、医療過誤専門の法律事務所を立ち上げました。

実際に産婦人科の医療現場を経験した医師として、法律と医学の両方の視点から産科を中心とした医療問題について発信します。

出産のトラブルでお困りの方は、是非一度お問い合わせください。

妊娠中に負担がからず、精度が高いとされる出生前診断・NIPT（非侵襲性出生前遺伝学的検査）、受検できる方の制限がほぼなくなり、実際に受ける方も増加してきました。NIPT（non-invasive prenatal genetic testing：非侵襲性出生前遺伝学的検査）も、そのひとつです。

NIPTとはどのようなものなのかをご紹介しつつ、受ける・受けないの選択についても検証していきます。

NIPT 負担が少なく精度の高い出生前診断



お腹の中に赤ちゃんがいる日々、顔を見る目を楽しみに過ごす一方、ふと不安を感じることは誰にでもあるのではないのでしょうか。ちゃんと元気に育っているかな、病気や異常は出ていないかな……など、妊婦健診だけではぬぐえないそうした不安に応えるために、また生まれたあとのすばい対応につなげるために、出生前診断（胎児診断）があります。

かつては検査の負担やリスクが大きい羊水検査しかなかったため、たくさんの方が受けることはありませんでしたが、時代が進み、妊婦さんに負担がからない検査も登場してきました。NIPT（non-invasive prenatal genetic testing：非侵襲性出生前遺伝学的検査）も、そのひとつです。

NIPTは採血のみで検査ができることや、かつてはあった様々な制限が撤廃され、希望すれば誰でも受けられるようになったこと、比較的高齢で妊娠する方が増えてニーズが高まっていることなどを背景に、近年、増加傾向です。

出生前診断のふたつのタイプ

そもそも、出生前診断には、どのようなものがあるのでしょうか。

出生前診断には、大きく分けて「非確定的検査」と「確定的検査」のふたつがあります。

非確定的検査

「この病気が異常ならこういふ確率がはるはず」という基準に従って、赤ちゃんがその病気や異常を持っている可能性を判定する検査です。

あくまでも異常がありそうか・なさそうかを振り分けるもので、病気を確定させるものではありませんが、妊婦さんにとって負担の少ない検査です。NIPTはこちらに該当します。

確定的検査

採取した身体の一部や細胞を調べ、病気を確定させる検査です。

非確定的検査と比較すると身体の一部が大きい、検査が原因で流産につながる危険もあります。そのため、通常は非確定的検査で「病気の可能性あり」となったあとに行います。

【出生前診断の種類と特徴】

	検査名	内容	確認できること
非確定的検査	NIPT	妊婦さんの血液中に流入している赤ちゃんのDNAの断片を調べる	13・18・21トリソミーの可能性
	超音波検査（エコー）	超音波を当てて赤ちゃんの身体を画像化する。妊婦健診で行われる通常の検査のほか、赤ちゃんの内臓も含めてより詳細に見る特約超音波検査がある	身体の一部の形態異常など
	母体血清マーカー（トリアプルマーカーテスト／クオトロテスト）	妊婦さんの血液中の特定の成分を測定し、胎児がある病気・異常を持っている場合の妊婦さんの数値とを比較することで、病気がある確率を算出する。3つの成分での検査はトリプルマーカーテスト、4つの成分のときはクオトロテストという	18・21トリソミー、神経管閉鎖障害の可能性
確定的検査	絨毛検査	胎盤から絨毛を採取して細胞を調べる	染色体異常（13・18・21トリソミー、性染色体の異常、染色体転座ほか）
	羊水検査	羊水を採取し、その中に含まれる赤ちゃん由来の細胞を増殖して調べる	

NIPTの検査方法は？



NIPTの検査に必要なのは、20mlほどの妊婦さんの血液だけ、そこに混入している赤ちゃんのDNAの断片を解析し、どの染色体がどれだけあるかを測定します。染色体が1本多いのなら、血液中に漂うその染色体の断片が通常より多くなっているはずという予想のもと、トリソミー（2本で一組になっている染色体が1本多い状態になっていること）の可能性を調べ、胎性・胎性として判定します。

赤ちゃんは血液を共有しているわけではないのに、DNAが妊婦さんの血液に入り込む理由は、胎盤にあります。胎盤はスーパーで売っているカイワレ大根の根元と似たような構造をしていて、妊婦さん側の組織であるスポンジ状の膜（基底膜）に、赤ちゃん側の組織である絨毛が食い込むようになっていて、その絨毛が新陳代謝すると、壊れた細胞からDNAの断片が壊れ、胎盤の中を血液と一緒に流れ出ていきます（cell free DNA）。NIPTはこの流れたDNA断片を利用して検査するので、

NIPTで判定するトリソミー

NIPTで判定するのは13・18・21トリソミーの可能性です。トリソミーは他の染色体にも起こりますが、これ以外のトリソミーは早い段階で流産してしまうのが大半であるため、調べてもあまり意味がないといわれています。逆に言えば、トリソミーであっても生まれてくることのできるものが、これらの染色体のトリソミーということになります。

各トリソミーの特徴は、次のようなものです。

13トリソミー

13番目の染色体が1本多い13トリソミーでは、体格が小さいほか、目の発育が良くなかったり、耳の位置が低めだったり、唇や口の中がちゃんとくっつかなかったり（口唇裂・口蓋裂）といった、身体の一部の形成異常がみられることが多いです。また、心臓や脳にも何らかの異常があります。

13トリソミーのお子さんの多くは生まれてくることはできず、生まれても生後1ヶ月ほどで亡くなる人が多いです。しかし、2割程度のお子さんは1歳の誕生日を迎え、1歳を迎えられた方の半数は10歳に達します。このため、かつては生まれても積極的に治療しないという選択がなされることも少なくなりましたが、近年少し状況が変わってきています。

18トリソミー

18番目の染色体が多い18トリソミーでは、赤ちゃんの体格が小さかったり体重が増えなかったりします。羊水は多すぎるか少なすぎるかなどから、脳や手足の大きさ・形状にも異常がみられることがあります。先天性の心臓疾患ほか、生まれてから様々な合併症がわかることもあります。

18トリソミーのお子さんの8割以上はお腹の中で亡くなってしまいます。生まれてくることのできたお子さんも1年以内に亡くなる方が9割です。しかし治療によって5年以上生存される場合も少なく、人によっては20歳を迎えることができた方もいらっしゃるなど、個人差も大きいようです。

21トリソミー

21トリソミーはいわゆるダウン症です。もっとも有名な染色体異常といってもいいかもしれません。

特徴的な顔立と発達遅れのほか、様々な合併症がありますが、全員にすべてが生じるわけではありません。頻度が高いのは先天性の心臓疾患、聴覚などで、また、子どもに白痴病のような病気を発症する方がいます。それ自体は一過性で大半の方が自然に治癒しますが、ダウン症の方が血液疾患になるリスクは、一般の人より高いといわれます。

かつては10歳程度でしか生きられないといわれていましたが、医療の発達によって、今では60歳を迎える方も多数になりました。また、あたたかく愛嬌のある方が多いといわれています。

NIPTのメリットとデメリット

NIPTのメリットを挙げるとしたら、次のようなものです。

- ・比較的早期から診断できる
- ・精度が高い
- ・採血だけで検査できるので、身体にほとんど負担がない

NIPTの受検が可能なのは妊娠10週からなので、早く検査したい妊婦さんには良いでしょう。また、非確定的検査ですが検査精度が高く、特に「胎性」とした場合の的中率は99%以上とされています。それでいて必要なのは採血だけで、身体への負担もさほどありません。

一方、デメリットとしては、次のようなものがあります。

- ・偽陽性（胎性と出たが本当はそうではない）もありうる
- ・21トリソミーの検出精度と比較して、13・18トリソミーの検出精度が劣る
- ・NIPT実施施設の中には「認証施設」と「非認証施設」があり、クリニックによって検査内容と費用にばらつきがある

NIPT全体の胎性の的中率は91%と高精度です。しかし、これは21トリソミーの的中率が突出して高いことで押し上げられた数字で、18トリソミーの的中率は90%をやや下回りすぎ、13トリソミーではほとんど五分五分です。

また、意外と知られていないのが「認証施設」と「非認証施設」があり、どちらを選ぶかで検査内容と費用の相場が変わることです。

	検査項目	費用	結果の通知方法
認証施設	13・18・21トリソミー	10～20万円程度	対面
非認証施設	各染色体トリソミー、微小欠失、ほか提供施設より異なる	6, 7万円～	郵送、メール、web上、対面など各種（郵送が多い）

認証施設の検査費用はいだいた10～20万円の範囲で、検査するのは3種類のトリソミーのみです。一方、非認証施設ではそれ以外の異常も検出可能であるといえるところが多数で、費用は最低ラインなら6, 7万円台と、認証施設よりやや安価です。

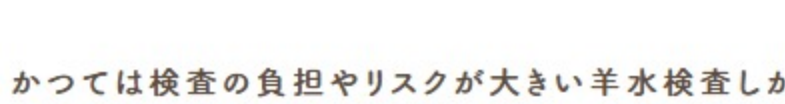
認証施設が検査対象を限定しているのは、3種類のトリソミーについては検査精度が確認されていること、そして出生前診断が本来とてもデリケートなものであることをきちんと認識しているからです。出生前診断の意義は、妊婦さんの安心のため、また胎性だったときには産後の環境を整えるため……などと考えますが、事実上妊娠の継続を判断するためのものとなっているので、胎性と出たときには専門的なサポートが必要です。認証施設ではその体制を整えています。

一方、非認証施設ではより広く異常を検出できるとしていますが、検査精度がきちんと担保・確立していない疾患も含まれています。そこで胎性がたとえともあろう信頼はできませんが、にもかかわらず妊婦さんは、お腹の命についての深刻な悩みを抱えることになります。それでいて、非認証施設の場合は結果が郵送やメールなどで送られるだけで、十分な説明やフォローがないことも多いのです。

妊婦さんご自身のお考えにもよりますが、NIPTを受けるのなら、なるべく認証施設を選ぶことをおすすめします。

※参考
出生前検査認証制度等運営委員会の追跡調査結果
https://jams-prenatal.jp/testing/nipt/follow-up-survey/

受けるか・受けないか？



NIPTが日本で行われるようになったのは2013年、それから10数年が経過して受検する方も増加し、将来的には受ける方がさらに増えていくのではという予想も出ています。

ただ、すでに少し遅れたように、NIPTを含む出生前診断は障害があることを排除する考え方にもつながる、非常にデリケートな問題ををはらんでいます。受ける方の多くは「安心を得たい」と検査に臨みますが、その安心という言葉を示すものは、「胎性を確認してほっとしたい」です。でも、もし胎性と出た、その方とはどのような気持ちになるのでしょうか。そして、どのような選択をするのでしょうか。

また、胎性で安心したとして、出生前診断でわかるのはほんの一部です。赤ちゃんが生まれてからわかる病気や異常もたくさんあることを、果たしてその方はきちんと認識されているでしょうか。もし、生まれたあとに出生前診断ではわからない病気や異常がわかったとしたら、その方とはどのように考えるのでしょうか。

NIPTを受けるか・受けないか。
それは、赤ちゃんの将来について、親としての責任を問われる選択です。

ご夫婦でよく話し合い、結果に対してどうするかをしっかりと決めてから、受検に臨んでいただきたいと思います。

NIPTを新しい世界を知るきっかけに



情報があふれる毎日の中で、妊婦さんが正しい知識を得ることも難しくなっています。ぜひ正確な知識を得てほしいと思います。

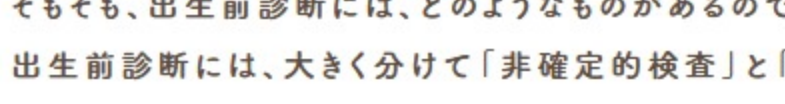
参考になるものとしては厚生労働省補助により制作された「[妊娠中の検査に関する情報ガイド](#)」（2023年6月公開）があります。

このサイトには、ダウン症のある人の暮らし方を紹介する[どうじんダウン症ガイド](#)もあり、妊婦さんやご家族に詳しく、出生前検査を含むさまざまな情報を提供するところをきくことで、安心して暮らすことができます。多様なダウン症の方々の生活のほんの一部ではありますが、この動画により、妊娠のある人に対する正しい情報が広く伝わることを望んで制作されたものです。「乳児期」「学齢期」「成人期」（2歳から59歳まで）の人の暮らし方や「余暇とスポーツ」などの動画も公開されています。

公益財団法人日本ダウン症協会（JDS）の「[子育て支援 - Happy しあわせのたのしみ](#)」（webサイト）、「[もっともっと知ってほしい！ ダウン症のある人たちのこころ](#)」（パンフレット）も参考にすることもおすすめです。

私自身は、上記JDSのホームページで紹介されていたエミリー・パウル・キングスレイさんの文章「[オランダにようこそ！](#)」に心揺さぶられました。興味がある方にはぜひ、直接ホームページを訪れて読んでみてほしいと思います。

NIPTを考えるとき、そのまじった時間が、何か大切なことを考える時間になればと思います。



医師・弁護士が対応します。
産科の医療過誤・医療事故でお困りの方はこちら。
産科に特化した情報を発信しています。

弁護士法人富永愛法律事務所
産科医療LABO 医療過誤 医療事故

富永愛法律事務所 医師・弁護士 富永 愛 です。

司法試験に合格し、弁護士事務所での経験を積んだ後、国立大医学部を卒業し医師免許を取得。

外科医としての勤務を経て、医療過誤専門の法律事務所を立ち上げました。

実際に産婦人科の医療現場を経験した医師として、法律と医学の両方の視点から産科を中心とした医療問題について発信します。

出産のトラブルでお困りの方は、是非一度お問い合わせください。

妊娠中に負担がからず、精度が高いとされる出生前診断・NIPT（非侵襲性出生前遺伝学的検査）、受検できる方の制限がほぼなくなり、実際に受ける方も増加してきました。NIPT（non-invasive prenatal genetic testing：非侵襲性出生前遺伝学的検査）も、そのひとつです。

NIPTとはどのようなものなのかをご紹介しつつ、受ける・受けないの選択についても検証していきます。

NIPT 負担が少なく精度の高い出生前診断



お腹の中に赤ちゃんがいる日々、顔を見る目を楽しみに過ごす一方、ふと不安を感じることは誰にでもあるのではないのでしょうか。ちゃんと元気に育っているかな、病気や異常は出ていないかな……など、妊婦健診だけではぬぐえないそうした不安に応えるために、また生まれたあとのすばい対応につなげるために、出生前診断（胎児診断）があります。

かつては検査の負担やリスクが大きい羊水検査しかなかったため、たくさんの方が受けることはありませんでしたが、時代が進み、妊婦さんに負担がからない検査も登場してきました。NIPT（non-invasive prenatal genetic testing：非侵襲性出生前遺伝学的検査）も、そのひとつです。

NIPTは採血のみで検査ができることや、かつてはあった様々な制限が撤廃され、希望すれば誰でも受けられるようになったこと、比較的高齢で妊娠する方が増えてニーズが高まっていることなどを背景に、近年、増加傾向です。

出生前診断のふたつのタイプ

そもそも、出生前診断には、どのようなものがあるのでしょうか。

出生前診断には、大きく分けて「非確定的検査」と「確定的検査」のふたつがあります。

非確定的検査

「この病気が異常ならこういふ確率がはるはず」という基準に従って、赤ちゃんがその病気や異常を持っている可能性を判定する検査です。

あくまでも異常がありそうか・なさそうかを振り分けるもので、病気を確定させるものではありませんが、妊婦さんにとって負担の少ない検査です。NIPTはこちらに該当します。

確定的検査

採取した身体の一部や細胞を調べ、病気を確定させる検査です。

非確定的検査と比較すると身体の一部が大きい、検査が原因で流産につながる危険もあります。そのため、通常は非確定的検査で「病気の可能性あり」となったあとに行います。

【出生前診断の種類と特徴】

	検査名	内容	確認できること
非確定的検査	NIPT	妊婦さんの血液中に流入している赤ちゃんのDNAの断片を調べる	13・18・21トリソミーの可能性
	超音波検査（エコー）	超音波を当てて赤ちゃんの身体を画像化する。妊婦健診で行われる通常の検査のほか、赤ちゃんの内臓も含めてより詳細に見る特約超音波検査がある	身体の一部の形態異常など
	母体血清マーカー（トリアプルマーカーテスト／クオトロテスト）	妊婦さんの血液中の特定の成分を測定し、胎児がある病気・異常を持っている場合の妊婦さんの数値とを比較することで、病気がある確率を算出する。3つの成分での検査はトリプルマーカーテスト、4つの成分のときはクオトロテストという	18・21トリソミー、神経管閉鎖障害の可能性
確定的検査	絨毛検査	胎盤から絨毛を採取して細胞を調べる	染色体異常（13・18・21トリソミー、性染色体の異常、染色体転座ほか）
	羊水検査	羊水を採取し、その中に含まれる赤ちゃん由来の細胞を増殖して調べる	

NIPTの検査方法は？



NIPTの検査に必要なのは、20mlほどの妊婦さんの血液だけ、そこに混入している赤ちゃんのDNAの断片を解析し、どの染色体がどれだけあるかを測定します。染色体が1本多いのなら、血液中に漂うその染色体の断片が通常より多くなっているはずという予想のもと、トリソミー（2本で一組になっている染色体が1本多い状態になっていること）の可能性を調べ、胎性・胎性として判定します。

赤ちゃんは血液を共有しているわけではないのに、DNAが妊婦さんの血液に入り込む理由は、胎盤にあります。胎盤はスーパーで売っているカイワレ大根の根元と似たような構造をしていて、妊婦さん側の組織であるスポンジ状の膜（基底膜）に、赤ちゃん側の組織である絨毛が食い込むようになっていて、その絨毛が新陳代謝すると、壊れた細胞からDNAの断片が壊れ、胎盤の中を血液と一緒に流れ出ていきます（cell free DNA）。NIPTはこの流れたDNA断片を利用して検査するので、

NIPTで判定するトリソミー

NIPTで判定するのは13・18・21トリソミーの可能性です。トリソミーは他の染色体にも起こりますが、これ以外のトリソミーは早い段階で流産してしまうのが大半であるため、調べてもあまり意味がないといわれています。逆に言えば、トリソミーであっても生まれてくることのできるものが、これらの染色体のトリソミーということになります。

各トリソミーの特徴は、次のようなものです。

13トリソミー

13番目の染色体が1本多い13トリソミーでは、体格が小さいほか、目の発育が良くなかったり、耳の位置が低めだったり、唇や口の中がちゃんとくっつかなかったり（口唇裂・口蓋裂）といった、身体の一部の形成異常がみられることが多いです。また、心臓や脳にも何らかの異常があります。

13トリソミーのお子さんの多くは生まれてくることはできず、生まれても生後1ヶ月ほどで亡くなる人が多いです。しかし、2割程度のお子さんは1歳の誕生日を迎え、1歳を迎えられた方の半数は10歳に達します。このため、かつては生まれても積極的に治療しないという選択がなされることも少なくなりましたが、近年少し状況が変わってきています。

18トリソミー

18番目の染色体が多い18トリソミーでは、赤ちゃんの体格が小さかったり体重が増えなかったりします。羊水は多すぎるか少なすぎるかなどから、脳や手足の大きさ・形状にも異常がみられることがあります。先天性の心臓疾患ほか、生まれてから様々な合併症がわかることもあります。

18トリソミーのお子さんの8割以上はお腹の中で亡くなってしまいます。生まれてくることのできたお子さんも1年以内に亡くなる方が9割です。しかし治療によって5年以上生存される場合も少なく、人によっては20歳を迎えることができた方もいらっしゃるなど、個人差も大きいようです。

21トリソミー

21トリソミーはいわゆるダウン症です。もっとも有名な染色体異常といってもいいかもしれません。

特徴的な顔立と発達遅れのほか、様々な合併症がありますが、全員にすべてが生じるわけではありません。頻度が高いのは先天性の心臓疾患、聴覚などで、また、子どもに白痴病のような病気を発症する方がいます。それ自体は一過性で大半の方が自然に治癒しますが、ダウン症の方が血液疾患になるリスクは、一般の人より高いといわれます。

かつては10歳程度でしか生きられないといわれていましたが、医療の発達によって、今では60歳を迎える方も多数になりました。また、あたたかく愛嬌のある方が多いといわれています。

NIPTのメリットとデメリット

NIPTのメリットを挙げるとしたら、次のようなものです。

- ・比較的早期から診断できる
- ・精度が高い
- ・採血だけで検査できるので、身体にほとんど負担がない

NIPTの受検が可能なのは妊娠10週からなので、早く検査したい妊婦さんには良いでしょう。また、非確定的検査ですが検査精度が高く、特に「胎性」とした場合の的中率は99%以上とされています。それでいて必要なのは採血だけで、身体への負担もさほどありません。

一方、デメリットとしては、次のようなものがあります。

- ・偽陽性（胎性と出たが本当はそうではない）もありうる
- ・21トリソミーの検出精度と比較して、13・18トリソミーの検出精度が劣る
- ・NIPT実施施設の中には「認証施設」と「非認証施設」があり、クリニックによって検査内容と費用にばらつきがある

NIPT全体の胎性の中率は91%と高精度です。しかし、これは21トリソミーの的中率が突出して高いことで押し上げられた数字で、18トリソミーの的中率は90%をやや下回りすぎ、13トリソミーではほとんど五分五分です。

また、意外と知られていないのが「認証施設」と「非認証施設」があり、どちらを選ぶかで検査内容と費用の相場が変わることです。

	検査項目	費用	結果の通知方法
認証施設	13・18・21トリソミー	10～20万円程度	対面
非認証施設	各染色体トリソミー、微小欠失、ほか提供施設より異なる	6, 7万円～	郵送、メール、web上、対面など各種（郵送が多い）

認証施設の検査費用はいだいた10～20万円の範囲で、検査するのは3種類のトリソミーのみです。一方、非認証施設ではそれ以外の異常も検出可能であるといえるところが多数で、費用は最低ラインなら6, 7万円台と、認証施設よりやや安価です。

認証施設が検査対象を限定しているのは、3種類のトリソミーについては検査精度が確認されていること、そして出生前診断が本来とてもデリケートなものであることをきちんと認識しているからです。出生前診断の意義は、妊婦さんの安心のため、また胎性だったときには産後の環境を整えるため……などと考えますが、事実上妊娠の継続を判断するためのものとなっているので、胎性と出たときには専門的なサポートが必要です。認証施設ではその体制を整えています。

一方、非認証施設ではより広く異常を検出できるとしていますが、検査精度がきちんと担保・確立していない疾患も含まれています。そこで胎性がたとえともあろう信頼はできませんが、にもかかわらず妊婦さんは、お腹の命についての深刻な悩みを抱えることになります。それでいて、非認証施設の場合は結果が郵送やメールなどで送られるだけで、十分な説明やフォローがないことも多いのです。

妊婦さんご自身のお考えにもよりますが、NIPTを受けるのなら、なるべく認証施設を選ぶことをおすすめします。

※参考
出生前検査認証制度等運営委員会の追跡調査結果
https://jams-prenatal.jp/testing/nipt/follow-up-survey/

受けるか・受けないか？



NIPTが日本で行われるようになったのは2013年、それから10数年が経過して受検する方も増加し、将来的には受ける方がさらに増えていくのではという予想も出ています。

ただ、すでに少し遅れたように、NIPTを含む出生前診断は障害があることを排除する考え方にもつながる、非常にデリケートな問題ををはらんでいます。受ける方の多くは「安心を得たい」と検査に臨みますが、その安心という言葉を示すものは、「胎性を確認してほっとしたい」です。でも、もし胎性と出た、その方とはどのような気持ちになるのでしょうか。そして、どのような選択をするのでしょうか。

また、胎性で安心したとして、出生前診断でわかるのはほんの一部です。赤ちゃんが生まれてからわかる病気や異常もたくさんあることを、果たしてその方はきちんと認識されているでしょうか。もし、生まれたあとに出生前診断ではわからない病気や異常がわかったとしたら、その方とはどのように考えるのでしょうか。

NIPTを受けるか・受けないか。
それは、赤ちゃんの将来について、親としての責任を問われる選択です。

ご夫婦でよく話し合い、結果に対してどうするかをしっかりと決めてから、受検に臨んでいただきたいと思います。

NIPTを新しい世界を知るきっかけに



情報があふれる毎日の中で、妊婦さんが正しい知識を得ることも難しくなっています。ぜひ正確な知識を得てほしいと思います。

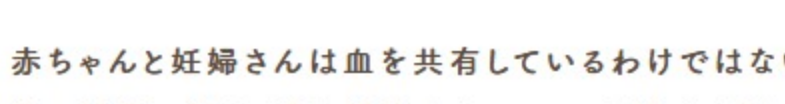
参考になるものとしては厚生労働省補助により制作された「[妊娠中の検査に関する情報ガイド](#)」（2023年6月公開）があります。

このサイトには、ダウン症のある人の暮らし方を紹介する[どうじんダウン症ガイド](#)もあり、妊婦さんやご家族に詳しく、出生前検査を含むさまざまな情報を提供するところをきくことで、安心して暮らすことができます。多様なダウン症の方々の生活のほんの一部ではありますが、この動画により、妊娠のある人に対する正しい情報が広く伝わることを望んで制作されたものです。「乳児期」「学齢期」「成人期」（2歳から59歳まで）の人の暮らし方や「余暇とスポーツ」などの動画も公開されています。

公益財団法人日本ダウン症協会（JDS）の「[子育て支援 - Happy しあわせのたのしみ](#)」（webサイト）、「[もっともっと知ってほしい！ ダウン症のある人たちのこころ](#)」（パンフレット）も参考にすることもおすすめです。

私自身は、上記JDSのホームページで紹介されていたエミリー・パウル・キングスレイさんの文章「[オランダにようこそ！](#)」に心揺さぶられました。興味がある方にはぜひ、直接ホームページを訪れて読んでみてほしいと思います。

NIPTを考えるとき、そのまじった時間が、何か大切なことを考える時間になればと思います。



医師・弁護士が対応します。
産科の医療過誤・医療事故でお困りの方はこちら。
産科に特化した情報を発信しています。

弁護士法人富永愛法律事務所
産科医療LABO 医療過誤 医療事故

富永愛法律事務所 医師・弁護士 富永 愛 です。

司法試験に合格し、弁護士事務所での経験を積んだ後、国立大医学部を卒業し医師免許を取得。

外科医としての勤務を経て、医療過誤専門の法律事務所を立ち上げました。

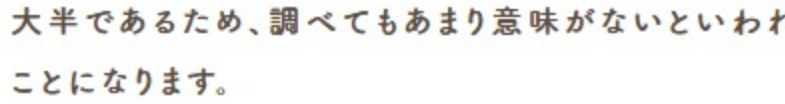
実際に産婦人科の医療現場を経験した医師として、法律と医学の両方の視点から産科を中心とした医療問題について発信します。

出産のトラブルでお困りの方は、是非一度お問い合わせください。

妊娠中に負担がからず、精度が高いとされる出生前診断・NIPT（非侵襲性出生前遺伝学的検査）、受検できる方の制限がほぼなくなり、実際に受ける方も増加してきました。NIPT（non-invasive prenatal genetic testing：非侵襲性出生前遺伝学的検査）も、そのひとつです。

NIPTとはどのようなものなのかをご紹介しつつ、受ける・受けないの選択についても検証していきます。

NIPT 負担が少なく精度の高い出生前診断



<